

帝都モノガタリ

『青は狂気を描く』

本シナリオの内容は虚構である。

現実のいかなる人物、団体、その他のものと一切の関係はない。

本シナリオでは大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現となるものが含まれていることがあるが、差別の肯定、助長する意図は決してない。

目次

はじめに	3 -
キーパー向け情報	3 -
シナリオの概要	3 -
シナリオの背景	4 -
『枯野』に落下した『宇宙からの色』	4 -
蕪木の『青い絵』	4 -
登場人物(NPC)	4 -
蕪木清晴、画家	4 -
丹羽仁、『丹青堂』の主人	5 -
児嶋鎮、華族のパトロン	5 -
温井継宗、官僚	5 -
プレイの準備	5 -
シナリオのフローチャート	6 -
1: 展覧会の『青い絵』	7 -
銀座の展覧会	7 -
蕪木の『青い絵』	7 -
『青い絵』の噂	7 -
蕪木の居所	8 -
2: 画家、蕪木清晴	8 -
蕪木清晴	8 -
蕪木に会う	8 -
蕪木の状態	9 -
3: 『丹青堂』、青い顔料	9 -
蕪木の青い顔料	9 -
丹青堂について	10 -
4: 『呪いの青い絵』	10 -
蕪木の絵の変遷	10 -
『青い絵』にまつわる事件	10 -
5: 『枯野』	11 -
『枯野』の噂	11 -
『枯野』の過去の住人	11 -
『枯野』で見つかった石	11 -
『枯野』に落ちた隕石	11 -
『枯野』に望む	11 -
宇宙からの卵	12 -
青い石	12 -
6: 温井継宗邸、火事の跡	13 -
温井継宗	13 -
火事の現場	13 -
7: 児嶋鎮邸、光の柱	13 -

蕪木のパトロン、児嶋鎮	14 -
児嶋邸へ乗り込む	14 -
宙に帰る『青』	14 -
その後の児嶋邸	15 -
8: 蕪木の最後の作品	15 -
9: 事件の後	16 -
10: 正気度の報酬	16 -
参考資料、その他	18 -
あとがき	18 -
奥付	18 -

『青は狂気を描く』

the Blue for Insanity

「いや、ブルーは狂気だ」

「なに？」

「そういうパターンなんだよ」

——— デイヴィッド・マレル『オレンジは苦悩、青は狂気』より

はじめに

本シナリオは『暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー』の対応したシナリオを『新クトゥルフ神話 TRPG』へコンバートしたものである。

3〜4 人の探索者向けにデザインされており、プレイ時間は探索者の作成を含めずに 2〜3 時間程度となる。

本シナリオは大正時代である為、『クトゥルフと帝国』、帝都モノガタリを使用したり、『トレイル・オブ・クトゥルー・ジャパン』を参考にするるとよいだろう。

本シナリオは『トレイル・オブ・クトゥルー』において純粋モードの傾向である。探索を中心とした静かなシナリオになる可能性が高い(もちろん、キーパーによってパルプモードのようにアクション成分を多めにする変更をしても問題ない)。

罫線(―・―)で囲まれた部分はプレイヤーに読み上げる部分である。そのままでもよいし、キーパーの好きなように読み替えても構わない。

正気度ルールについて、1/1D4 のような表記を行う。これは、ルールに成功した場合は 1 点、失敗した場合は 1D4 点の正気度を喪失することを表している。

シナリオの便宜上、各場面に番号を振っているが、時系列ではないので注意すること。

探索によって得られる情報について、対応した技能を記載しているが、キーパーの判断で適宜変更して構わない。特にコミュニケーション系の技能については、探索者の手段や態度に合わせて決めよう。

キーパー向け情報

シナリオの概要など、キーパーが事前に読む内容である。

シナリオは大正中期から、震災前の帝都を舞台としていることを想定している。それ以前、以降でプレイする場合、キーパーは適宜、シナリオ中の年代や帝都の様子を変更すること。

また、本シナリオは帝都モノガタリに掲載の『灯火の行く橋』の後の物語となる。

独立したシナリオとして用いる場合は問題ないが、『灯火の行く橋』をプレイする可能性がある場合は時系列に注意して欲しい。

シナリオの概要

探索者達は友人の画家、蕪木清晴が出展しているという銀座で開かれている怪想社主催の絵画展へ赴く。

展示場で彼が描いた異様な抽象絵画のような『青い絵』を見た探索者達は、蕪木ブルーとも呼ばれるその独特な青色に不安を覚える。

蕪木の描いた『青い絵』は、何故か非常な人気と『呪いの絵』としても噂が立っていた。

不穏な噂を聞きつつ、探索者達は『青い絵』の謎を追って、彼の懇意にしている画材屋『丹青堂』へ赴く。

『丹青堂』でその青の顔料の出所が、巢鴨の『枯野』であることを聞き出し、灰色一面になっている『枯野』の探索で、青く流れる異次元の色彩『宇宙からの色』を発見して、撃退する。

彼の絵を買ったという温井継宗の屋敷の火事の跡で灰色の痕跡を見つけた後、児嶋鎮の屋敷で『青い

絵』が光を発して、周辺から生命力を吸い取って天へ帰っていく様を目撃する。

探索者達は下宿の屋根裏に隠れていた蕪木と彼の最後の作品を見つけ出し、『青い絵』が天に還る様を目撃することになる。

シナリオの背景

シナリオの背景になる情報である。直接関係ない部分もあるが、シナリオの理解のため一読して欲しい。

『枯野』に落下した『宇宙からの色』

『枯野』に落下した『宇宙からの色』を宿した隕石は、運悪く地表面近くで4つに分裂してしまった。

最初に孵化した最も大きな破片のものは、帝都モノガタリ『灯火の行く橋』で探索者達に撃退された(か、宇宙に帰っていった)。

次に孵化したものは『枯野』の生物から生命力を吸収した後、宇宙へ帰っていった。これが現在の灰色の『枯野』の原因である。

残った小さな二つの破片は吸収すべき生命が無い状態となった『枯野』で、隕石に籠ったまま時を待っていた。

たまたま近隣の住民が『枯野』に埋まっていた隕石の一つを掘り出し、珍しい青い石として『丹青堂』の主人に安く買われて、高価な顔料の代替品として使用された。

蕪木の『青い絵』

この『宇宙からの色』を含んだ石を原料として作られた岩絵具を使用して描かれたのが、蕪木の『青い絵』である。

蕪木の元にある『宇宙からの色』を含む絵具は、『青い絵』を描かせることで自身や、砕かれて分裂した自身の分身を宇宙に還そうとしている。

『青い絵』となった『宇宙からの色』は、持ち主の精神に影響を及ぼして絵を所有することに執着させ、その生命力を吸収しながら宇宙へ還ろうとする。これが『呪いの絵』と言われる様々な事故や事件を引き起こすことになる。

そして、最後に残った『青い絵』は蕪木自身の生命力を吸収して宇宙に還ろうとしている。

登場人物(NPC)

シナリオに登場する人物を紹介する。キーパーはここに記載されているデータを好きなように変更しても構わない。

特に技能などは記載しないが、必要に応じてキーパーが持っている/持っていないことを決めるとよいだろう。

適宜 NPC を増減させるのも問題ない。特に怪想社に関係がある NPC などを登場させて探索者の情報源とするとキーパーはコントロールが楽になるかもしれない。

蕪木清晴、画家

かぶらぎ・きよはる、画家。

蕪木は西洋画を学んだが、その後に日本画に転向。東京美術学校(現在の東京芸術大学の前身の一つ)を卒業している。

今までは鳴かず飛ばず、とまでは行かないがそれほど売れず、噂にもならず、知人の編集者に『怪想社』の仕事を紹介してもらって、なんとか糊口を凌いでいた。

『丹青堂』で青い岩絵具を手に入れて以降、怪奇路線、抽象絵画を描くようになり、これが売れるようになるが、徐々に狂気に蝕まれていく。

狂気に蝕まれるほど絵の凄みが増して、より評価されるという循環が出来てしまい、すっかり青い絵の虜になっている(『宇宙からの色』の影響もあるが)。

現在、下宿先に閉じこもって最後の絵を仕上げている。

STR 40 CON 45 SIZE 60 DEX 80 INT 70
APP 55 POW 50 EDU 80 正気度 32 耐久力 6
DB:+0 ビルド:0 移動:8
近接戦闘(格闘)25%、ダメージ 1D3+DB
回避 40%

技能：応急手当 40%、聞き耳 70%、芸術(日本画) 80%、心理学 40%、説得 50%、図書館 70%、目星 60%、歴史 70%、信用 30%
※彼はまともに技能が使える状態ではないが、必要であればキーパーが可不可を判断する
※蕪木の耐久力は『青い絵』を描く為に減少している。

東京美術学校：通称、美校。現在の東京芸術大学の前身の一つ(東京芸術大学は、戦後の昭和24(1949)年に東京美術学校と東京音楽学校が統合して設立)。
明治 20(1887)年に下谷区上野に設立された唯一の官立の美術専門学校で、5年制だった。当初は伝統美術の保護が目的だったが、西洋画なども教えるようになり、様々な芸術家を輩出した。

丹羽仁、『丹青堂』の主人

にわ・ひとし、『丹青堂』の主人。

先代は趣味人で商人だったが、2代目は職人気質でよい画材を取り扱っていると評判である。

パトロンになれるほど経済的な余裕は無いが、資金に乏しい若い画家たちに格安で画材を提供するなどして援助している。

蕪木が手に入れた青い顔料も、『枯野』で手に入れた青い石を使って特別に安く顔料を作っている。

STR 70 CON 65 SIZE 65 DEX 60 INT 50
APP 45 POW 70 EDU 90 正気度 70 耐久力 13

DB:+1D4 ビルド:1 移動:8

近接戦闘(格闘)25%、ダメージ 1D3+DB

回避 30%

技能：鑑定 80%、芸術(日本画) 80%、芸術(美術史) 70%、説得 60%、図書館 50%、目星 70%、歴史 50%、信用 60%

児嶋鎮、華族のパトロン

こじま・しずむ、華族のパトロン。

蕪木の『青い絵』の犠牲者の一人である。売れない時代から蕪木と付き合いがあり、それによって『青い絵』を贈られている。

最初はあまり気に入っていなかったが、『青い絵』=『宇宙からの色』の精神攻撃によって絵を手放せなくなっている。

児嶋はシナリオに登場する時点で行動不能となるため、能力値等は省略する。

温井継宗、官僚

ぬくい・つぐむね、官僚。

蕪木の『青い絵』の犠牲者の一人である。話題の『青い絵』を購入した。

元々絵にはあまり理解が無い(興味が無い訳ではない)為、絵の良し悪しは判断できないが『青い絵』=『宇宙からの色』の精神攻撃と能力値吸収によって狂気に陥ってしまい、それに抗って絵を焼く為に放火、絵もろとも焼死した。

温井はシナリオ開始時点で死亡しているため、能力値等は省略する。

プレイの準備

実際のプレイの開始の前に、探索者同士の関係性は決まっていることが望ましい。

探索者の作成、バックストーリーの編集の段階で、以下のシナリオの冒頭を伝えたとよいだろう。

— — — — —

大正中期、震災前の帝都。

探索者達は銀座で開催されている展覧会へ、友人の画家である蕪木の『青い絵』展示を覗に行く。

探索者は『青い絵』の異様さに異常を感じとり、その探索を始める。

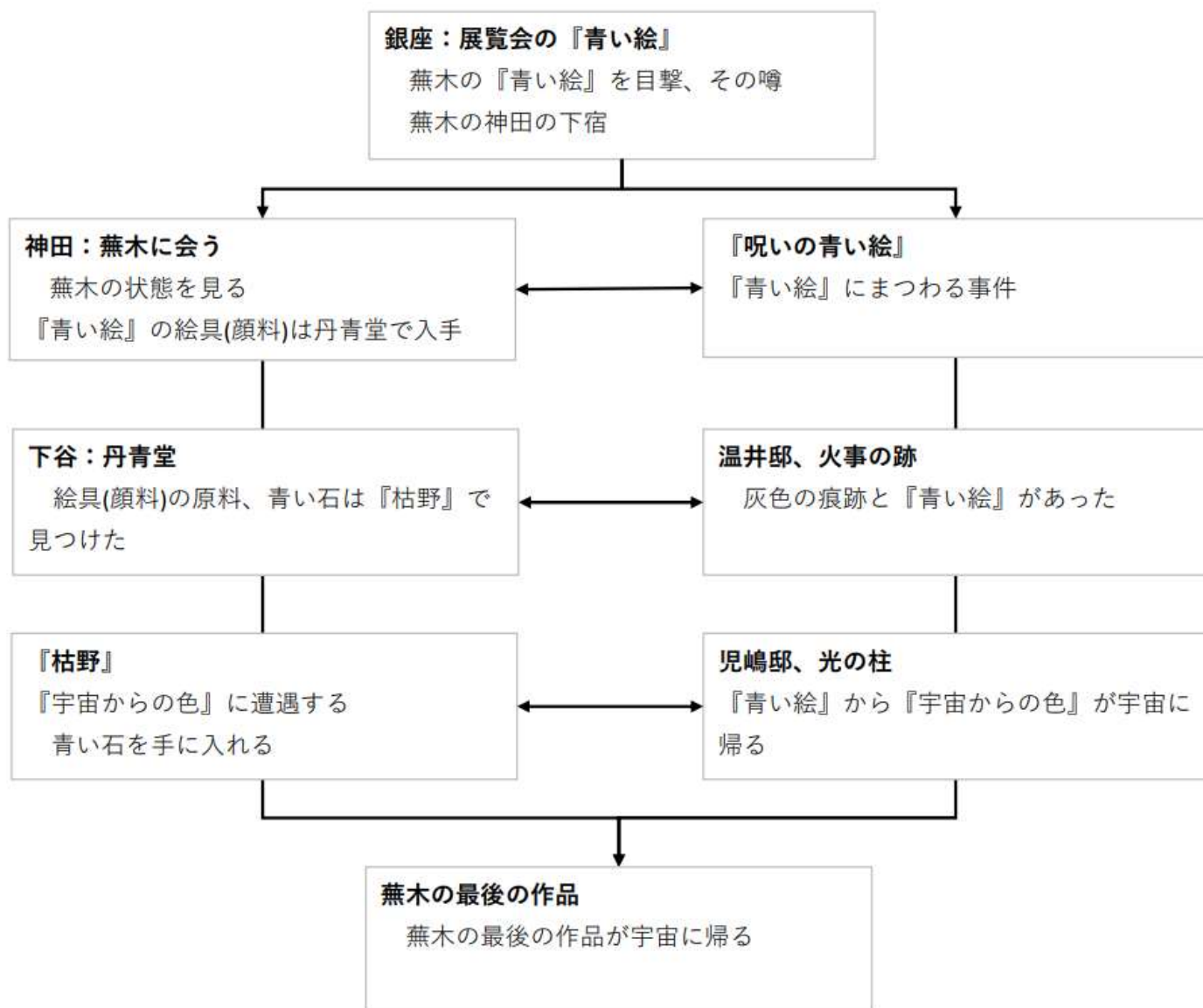
— — — — —

ハンドアウトなどはないが、取得した(あるいは、する予定の)技能を絡めて、蕪木との関係や、事件にどうか関わっていくか、どう興味を持つのかを決めておく。

シナリオのフローチャート

シナリオのフローチャートを示す。

半ば箱庭型であるため、この通りになるとは限らないが、シナリオ進行の指針にはなるだろう。



シナリオの導入部となる。蕪木の友人、怪想社に
関係がある場合は招待をされて、美術、芸術に関心
を持つ場合は、単純な興味や噂の絵を見るなどの理
由で訪れたことにするとよいだろう。

京橋区の銀座で怪想社主催の展覧会が開かれている。

主に若手(と言う名の売れない画家)が中心のものだが、その一人に探索者達の友人である蕪木清晴も混じっている。

蕪木は現在、噂になっている『青い絵』が売れている為、若手を脱しつつある。

蕪木がまだ売れていなかった頃、学生時代の知り合いを通じて怪想社の雑誌の挿絵の仕事などを受けおり、今回の出展となった。

蕪木の絵が4点ほど展示されており、3点はオレンジ色を基調とした写実的な風景画だが、1点だけ全く異なる抽象絵画のような『青い絵』がある。

怪想社の取り扱うジャンルが怪奇・幻想である。それらをテーマにした絵画が多い中で、この『青い絵』は別格と言える。

その蕪木の『青い絵』は純粹抽象絵画のように何が描かれているかは判別、理解し難いが、画面を埋め尽くす『青』に吸い込まれる印象を受ける。

_____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____ • _____

その絵は様々な『青』で埋め尽くされている。
いわゆる抽象絵画というものだろう、具体的な何か
が描かれているわけではないのに、ひどく不安な気
持ちにさせる。

何を表しているのか、この不安の正体は何か、目を背けたくなるにも関わらず、ひどく引き付けられる絵だった。

気が付くと、ただ無言に『青』に見入っており、これをもっと眺めていたい気にさせられた。

_____ . _____ . _____ . _____ . _____ . _____ . _____ . _____ . _____ . _____ .

蕪木の『青い絵』を見た探索者は、この青は非常に独特で、妙にきらきらとして流れる玉虫色のような印象を受けるが、視覚としては青く感じる。

関係者はこれを『蕪木ブルー』などと呼んで、彼の絵の価値を高めるのに利用している。

<芸術(絵画に関係あるもの)>を所持している場合は自動的に、その他の<芸術>、<科学(地質学)>などに成功した場合、この絵に使われている青の絵具は日本画で使われるいわゆる岩絵具で、色のついた鉱石を細かく粉碎し、それを胡粉で定着させるという技法であることが分かる。

この色に近いのは群青だが、それ以外の特殊な顔料を使っていると思われ、実際の絵具があれば詳細が分かる可能性がある。

<芸術>に失敗した、所持していない場合は、展覧会の案内や同じく展覧会に来ている好事家などから解説してもらえたなどとする(後々の利便性を考えて、怪想社の知り合いの編集者の NPC などを登場させておくのもよいだろう)。

探索者が『青い絵』の観察を続けた場合、その吸い込まれそうな印象、今までに見たことが無いような色のはずだが、それをどこかで見たような錯覚を覚える。

それを見続けていると、その青が宇宙の色だという妄想が芽生え、0/1 の正気度を失う。

美術や芸術に興味のある探索者ならば、すでに蕪木の絵の評判や、それにまつわる噂を聞いたことがある。

展示されている通り、蕪木の絵は2種類ある。オレンジを基調にした写実的な風景画と、青い抽象絵画。関係者いわく、「オレンジは苦悩、ブルーは狂気」。

風景画が売れないのが高じて悩みが狂気に転化したのではないか、などと口さがない連中や、まだ売れていない画家が言っているという。

蕪木の『青い絵』は呪いの絵とも呼ばれている。見る者に狂気を呼び、不幸をもたらすと噂されており、購入者が死んでいるという。

<芸術(絵画に関係のあるもの)>、<芸術(美術史)>などのロールによって、蕪木の『青い絵』はいわゆる抽象絵画、特に最近西欧で出現した『純粹抽象絵画』と呼ばれる、自己表現的な抽象絵画ではないかと推測される。

『純粹抽象絵画』はオカルティックな世界観に加え、神智学の影響を受けたなどと言われているが、蕪木にはオカルト趣味、神秘主義的なところは無かった。

抽象絵画：文字通り、従来の具象的な絵画と対照的に抽象的な絵画のことである。1910年代から始まり、発展を見た。

オカルトや神智学と結びついたり、何となれば禅だったりするが、人によって解釈の別れる、解釈の無い絵画である。

蕪木の居所

展覧会の会場には蕪木の姿は見えない。元からあまり社交的な性格ではなかったが、この青い絵を描くようになって以降、人嫌いが高じて半ば行方不明のようになっている。

蕪木の友人である探索者は、彼が神田周辺に下宿していることは知っているが、大体の住所であり、実際にはどこに住んでいるかは分からない。彼と顔を合わせるのには、近所と思しき学生向けの安い喫茶店や居酒屋だ。

怪想社の関係者に確認した場合、彼の下宿先の神田にある煙草屋の場所を知ることが出来る。

当時の人々は今で言うプライバシーや、コンプライアンスの意識は薄い(というよりも無いに等しい)。探索者が友人であったり、妥当な理由を告げた場合、特にロールの必要は無いが、交渉の方法や、蕪木と友人ではないなどの場合は、コミュニケーション系のロールを行わせるのもよいだろう。

2:画家、蕪木清晴

探索者が蕪木について探索を開始し、その情報を集めた場合、以下の情報を得ることができる。

蕪木清晴

友人関係や美術関係、仕事で関係のある怪想社などで蕪木について聞きこんだ場合、以下のような情報を得る。

蕪木は売れない芸術家として近隣に認知されていたが、例の『青い絵』が売れているせいで芽が出ない画家の卵から、画家先生へと評価が変わっている。

売れない時代は彼のパトロンであった児嶋の他に、美校時代の友人が訪ねて来るぐらいだったが、最近ばかりとした身なりの画商らしき姿も見られるようになった。

蕪木自身は売れるようになったにも関わらず、学生街である神田から動かず、新たな下宿を探すようなこともなく、相変わらずの様子で創作に励んでいる。

蕪木に会う

蕪木は神田区の学生街にある煙草屋の2階に下宿している。

探索者が訪ねると2階からふらふらとした様子で蕪木が降りてくる。彼は探索者が直接訪ねて来たことには疑問を抱かない。

蕪木の大体の住所しか分かっていない場合は、周辺をうろうろしていると食事に出て来た蕪木と遭遇したなどとすればよいだろう。

彼は常と変わらない様子で、自身の部屋兼アトリエには人を入れたがらないのに加え、今はいつも以上に散らかり放題なので、いつもの通りそこらへんの安い学生向けのカフェや、居酒屋に行こうと言う。

蕪木は見るからに不健康そのもので、歩くのも難儀な様子でふらふらとしている。探索者が声を掛けると、大丈夫だと応え、今、描いている作品が最高傑作になるであろうことや、創作が佳境なので少し根を詰めすぎているだけだろうと言う。

ここでは探索者が蕪木に張り付くことがないように、不健康ではあるが素行に不自然ではないと伝える。また、彼は人嫌いとはまでは行かないが、創作については静かな場所で孤独に行うことを好むため、作業場、作業中の立ち入りはよほどのことが無い限り拒否する。

青い顔料について探索者が訪ねた場合、彼はそれを本郷の画材屋『丹青堂』で特別に安く手に入れたと告げる。学生時代から懇意にしており、今でも画材はそこから購入していると話すが、ぽつりと「あの青はもう無くなってしまう」と呟く。

これ以降、蕪木を訪ねても留守であり、半ば行方不明の状態となる。彼は探索者と会った後、『青い絵』を完成させるために自室に籠っている。作品自体が天井裏そのもので、そこに入り込んでおり、大家からは留守のように思われている。

探索者が強引に入り込もうとする可能性はあるが、大家にやんわり断られるか(大家は蕪木の人嫌いを知っているし、アトリエ兼自室へ人を通さないように言われている)、ひどい場合は警察へ通報される。

蕪木の状態

蕪木の不健康な様子は、<医学>のロールの必要もなく分かる。

その顔色は青いのを通り越して、死人のような灰色になっている。明らかに健康状態がおかしいが、その原因は分からない。まるで生命そのものが衰弱しているように思える。

皮膚の潤いも失われてカサカサに乾燥しており、通常の間人のような肌色が失われていることが分かる。

蕪木は自分自身の体調や精神状態について「大丈夫だ」の一点張りだ。

創作が佳境であり、邪魔が入るのを好ましく思っていないことは確かだが、探索者達を騙すような意図はない。

彼自身の認識では多少は身体が重いものの、創作意欲が溢れてとにかく絵が描きたいと思っており、そこに嘘は無い。

多少強引にでも、<医学>によって彼の健康診断をした場合、疲労と睡眠不足、極度の集中による精神的な衰弱であると分かり、単純に疲れすぎている、という判断になる。

肌の灰色化などの原因は分からないが、表面の皮膚だけではなくかなりの深度までそれが及んでいることが分かる。

3:『丹青堂』、青い顔料

『丹青堂』は本郷区(現在の文京区の辺り)、湯島天神(湯島天満宮)の近くにある小振りな商店だ。

元は江戸から続く小間物屋だったが、明治期に主人が日本画に凝り出して上野の東京美術学校(通称、美校)の学生相手に商売を始めたのがきっかけで画材を主に取り扱うようになり、次第に主力の商品となっていった。

蕪木が懇意にしている店であり、貧乏で困っていたときにも親切にしてもらっていた。絵が売れるようになってからは借金のようなものは全て奇麗になっており、お礼としてオレンジの絵の風景画を贈って、それが店先に飾られている。

探索者が店に入ると、大量の本格的な画材が整然と、しかし所狭しと並ぶのに圧倒される。中には日本画だけでなく、西洋画にも使うような道具も置かれており、幅広い商品を扱っていることが分かる。

店の奥に声を掛けると、主人の丹羽仁が出てくる。

丹羽は蕪木の様子から心配はしているが、それもある意味では平常運転なのでそれとなく様子を聞いた程度だ。蕪木とは個人的な付き合いはほとんどないので、彼の個人情報を持っていない。

蕪木の青い顔料

丹青堂の主人、丹羽に蕪木の話を出して、『青い絵』について聞いた場合、特にロールの必要なく以下のことを教える。

蕪木ブルーと呼ばれている青色は、群青に近いだが、それとは異なるものだ。群青は普通、藍銅鉱(アズライト)や、それに孔雀石が混じったものを使うが、蕪木の使っている青色は巢鴨の『枯野』で拾

ってきたという石で作った。石の色合いは藍銅鉱に似ていたが、実際はまったく違うもので何かは分からなかった。

蕪木から少しでも安い顔料が欲しい、と言われていたので試みに作ってみたところ、思いのほかよい色が出たので蕪木その他、何人かに渡した。しかし、あの青色を出せたのは蕪木だけだったので、それを使い続けたのも彼だけだ。

蕪木は金が無い時代でも顔料にこだわっていた。顔料は貴重な鉱石を使うものが多く、基本的に高価だが、彼はそれこそ命を削って絵を描いていた。

丹青堂について

探索者が『丹青堂』について調べた場合、以下の情報を得る。特にロールの必要はない。『丹青堂』の主人、丹羽との話の中に情報を盛り込んでいくのもよいだろう。

大阪にも『丹青堂』という江戸から続く書道、画材を扱う店があるがこことは無関係である。丹は赤を表すので、日本の伝統的な色として付けた名前が被ったようだ。

上野にある東京美術学校(現在の東京芸術大学の母体の一つ)に近いこともあり、学生が多く来る店である。

蕪木のように才能があっても金が無い学生や画家に格安で画材を譲っているが、店主の見る目は厳しく確かであると有名だ。

先代は絵の才能もそれなりにあり、道楽者ながら人脈を築いて画材屋としての道を開いた。

2代目は職人氣質で画材の目利きは確かで、画材屋としては堅実な商売を行っている。絵を描く才能は無いが、絵画の評価の方も確かであるとその業界では有名になっている。

4: 『呪いの青い絵』

探索者が蕪木の『青い絵』にまつわる噂を調査した場合、美術界隈で流布している以下の噂を聞くことができる。

蕪木の絵の変遷

蕪木が描く『青い絵』はいわゆる純粹抽象絵画のように見えるが、こういった絵を手掛けたことはそれまで一度もない。一連の『青い絵』から急に画風が全く変わってしまっている。

元は日本画の写実的なものを描いていたが、それに至るまでに西洋画も含めて様々な試行錯誤をしていたので、その中に抽象絵画があってもおかしくはない。

抽象絵画について、彼は美校に通っていたこともあり、海外の芸術にも精通する友人知人も多い為、全く知らないということはあるが、急に作風を転換する何かがあったのではないと思われる。

蕪木は『青い絵』を描きだしてから人気が出て、絵を買い求める人が増えたが、有名になった為にオレンジの絵の方も売れ始めていて『味わいがある』と好む人も多い。

『青い絵』にまつわる事件

図書館や新聞縦覧所などで最近の事件を確認した場合、以下の最近蕪木の絵を買った人間を一通り得られる。特にロールの必要は無いが、確認には時間が掛かる。

温井継宗(華族)、青い絵、火事で死亡記事を発見。

水越勝(画商)、青い絵、死亡記事を発見。

柿崎太蔵(華族)、オレンジの絵、購入記録のみ。

寺島定一(商人)、青い絵、入院した噂。

斎藤智信(画家)、オレンジの絵、購入記録のみ。

安田元三郎(商人)、オレンジの絵、死亡記事を発見。老衰死。

児嶋鎮(華族)、青い絵、購入記録のみ。

情報を得た後、実際に調査が可能なのは温井邸の火事の跡か、生存している人物のみであることを伝える。

当時は、有名無名を限らず事件や事故の当事者を実名入りで報道するのが普通だった。記事によっては住所まで記載されている為、それによってここに挙げた人物の住所なども分かる。

<図書館>などで資料の精査を行うか、警察関連に聞き込みをした場合、蕪木の絵を購入した人物で、何

らかの事件性がある記録に残っているのは以下の2件だと分かる。

温井継宗、屋敷が全焼。家人は主人がおかしくなっただけ繰り返しており、被害者が火事の屋敷から逃げ出そうとしておらず焼死している。

寺島定一、突然暴れ出して家人に取り押さえられる。以降、根岸病院に収容され、面会謝絶になっている。

当時の新聞記事など：多くの新聞記事はそれを誰が書いたかということが分かるように記名があった。一応、書いた者の責任があると提示していたのだ。このために、記事を見て怒った読者が新聞社にその記者を出せと来ることも珍しくなかった。

シナリオ中に記載もしているが、当時の新聞記事には関係者(事件の加害者、被害者問わず)の住所、氏名、年齢などの情報が載ることも普通だったため、面白半分に記事に登場する人物を見に行ったり、気に入らない相手に投石したりなどということもあった。

5: 『枯野』

大正初期までは巣鴨と言えど帝都の郊外で風光明媚な土地であり、有名な巣鴨病院もあった。大正も中期になると帝都の人口増加に伴い開発が進み、巣鴨病院も大正 8(1919)年にさらに郊外の松沢病院へと移転している。

『枯野』がある辺りはまだ開発の進んでいない、人もまばらな土地である。

省電の巣鴨駅からさらに北へ抜ける間道沿いにある、灰色になった場所である。その先には昔、宿場町だったような小さな村が残っている。

『枯野』の噂

『枯野』について探索者が調査した場合、その手段に合わせて適宜ロールを行い、以下の情報を得ることができる。

『枯野』の過去の住人

過去、『枯野』の近くに前に小泉宗一という小説家が住んでいたという。一時、危篤状態になって病院に担ぎ込まれた後、家を取り壊して引っ越して行って戻ってきていない。その後、『枯野』で大火事があり、灰色の野になった。

キーパーへ：

『灯火の行く橋』の探索の結果によって、この小泉宗一の情報は変更しよう。

『枯野』で見つかった石

青い岩石は村の子供が好奇心から『枯野』を見に行った時に発見したものだ。たまたま集落に来ていた絵画の心得のある者が、この岩石が藍銅鉱に似ていることに気が付き、貴重なものであるかもしれないと買い取り、『丹青堂』の丹羽に売ったようだ。

『枯野』に落ちた隕石

明治末期のハレー彗星が出現した時期に前後して、この辺りに隕石が落下したという記録がある。

帝大の寺田寅彦が調査したという話だが、詳細な記録は残っていないようだ。

『枯野』に望む

『枯野』は2ヘクタールほどの広さで、その名前の通り枯れ果てた土地だ。灰色の野は、あらゆる生命力と色彩が失われており、荒れていると言える状態かも知れない。灰色一色で遠近感がなくなる異様な空間となっている。

一面が灰色だった。

まるで大火事ですべてが灰燼に帰した後のようにも思えるが、一切の色彩が失われているように、全てがむらなく灰色の異様な光景だった。

遠近感の無いその灰色の野には生命が途絶えており、地面には草も生えておらず、鳥が飛ぶこともなく、灰色の積もった地面には生き物の痕跡すら認められなかった。

『枯野』の現象について、近隣に住民もなく利用されている土地でもない為、誰も気にしていない。

江戸期においては『枯野』の縁に小さな神社があった為に、それで人が行き来していたことはあったが、明治初期の神仏分離によって打ち壊されて以降、全く無人となっている。

この異様な灰色の土地、『枯野』に踏み込んだ探索者は、1/1D4+1の正気度を失う。

<自然>、<科学(植物学、生物学、動物学)>などによって、『枯野』は大火事があるってこのような灰色の野になったと思われているが、実際は焼けて灰になったのではなく、色彩を失って死んでいることが分かる。何らかの作用がこの場から色と命を奪ったのだ。

『枯野』にはよく見ると大小4か所のクレーター状の地形があることが分かる。大きな落下物が途中で4つに割れたのではないかと推測できる。

キーパーへ：

『灯火の行く橋』ではこの地は不自然に豊かな緑に覆われた土地であったため、クレーターが4つあることが分からなかった。

宇宙からの卵

探索者がクレーターを調べた場合、4か所のうち一番小さなものに土中に埋もれた青い石を発見する。それが『丹青堂』の主人の言っていた青い石であることが分かる。

<幸運>に成功すると、掘り出した石が脆く割れるような気配に気が付き、何らかの行動(石を捨てる、置いて離れるなど)を取ることが出来る。そうでない場合、石は探索者の手の中で割れる。特に誰が持っているか分からない場合は、最も不幸な探索者(幸運が最も低い探索者のことだ！)が持っていることになる。

土中から掘り出されたそれは、探索者の前でまるで何かが孵化するように内側から割れ、玉虫色のねっとりとした色がつくように動く色彩が、腐った卵の中身のようにあふれる。

玉虫色の色彩にも関わらず、それは何故か『青く』感じ、蕪木の青い絵から感じる印象を受け、こ

れを目撃した探索者は0/1D4の正気度を失う。

割れる瞬間にこの石を持っていた探索者は1D3の耐久力を失う。

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

探索者の前で青い石は割れた。

それはまるで鳥などの卵の殻を破って、中から雛が孵る様子を連想させたが、そこからあふれ出たのは玉虫色の色彩で、立体感のないただ色としてだけ感じられる異様な存在だった。

探索者は、そいつを何故か『青く』感じた。

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

土中から掘り出されたことで孵化した『宇宙からの色』と戦闘となる。詳細はルールブックのP.278を参照。

この『宇宙からの色』は孵化したてのうえに栄養が不足している。各能力値を1/3としたうえ、疑似的な耐久力を3+(探索者から奪った耐久力)点持つ。

さらにそもそも孵化すらできなかったのが無理矢理出て来た為、毎ラウンド自動的に疑似的な耐久力が1点減少する(「早すぎたんだ！腐ってやがる」という状態だ)。

通常、『宇宙からの色』には物理攻撃は通用しないが、そいつを閉じ込めていた殻(青い石)での打撃は有効となる(強い磁気を帯びているとともに、『宇宙からの色』を閉じ込めておける殻である)。この殻は<近接戦闘>で使用する武器として扱う。

『宇宙からの色』を撃退すると、玉虫色の色彩は地面に染みていくように消え、微かに青い光を残すがそれもすぐに消えて、後には何も残らない。

そいつが出て来た青い石には空洞のようなものがあり、ますます卵のように思える。内部にはまだ青い色が残っており、まるで例の玉虫色をした青色が岩石に染みているように見える。

青い石

発見した青い石を調べた場合、<科学(地質学)>などでそれが隕石であり、地球上のものではない物質を多く含んでいることが分かる。

『丹青堂』に戻ってこの石を見せると、確かに同じ石だと請け合うが、前のものはもっと大きく、色も鮮やかで、「活きがいい青だった」と言う。

『丹青堂』の主人は藍銅鉞に似ているかもしれないと言ったが、青色であること以外はあまり似ていない。丹羽は地質学など知らず、単純に似ている色として判断したようだ。

キーパーへ：

『灯火の行く橋』をプレイしている場合、再び寺田寅彦に話を聞きに行くなどしても面白いだろう(前回と同様の隕石だ、という確証が得られる以外に情報は無いが)。

6:温井継宗邸、火事の跡

『青い絵』の購入者の一人、温井継宗の屋敷は麻布区にある(現在の港区六本木の辺り)。火事があって全焼しており、まだ片付けられておらず生々しい痕跡を残している。

閑静な街であることに加えて、屋敷の敷地が広く隣家との距離があることもあって、人気は無い。

屋敷の跡地へ入るのには制限は無いが、無人の家族の敷地へと無断で入るのを警官や近所住民に見られるのはあまりよろしくないだろう。

温井継宗

温井について官僚や華族の知り合いに確認した場合、以下の情報を得ることができる(特にロールの必要は無いが、<信用>が高く、身分が高いものが照会できる)。

彼は華族で官僚だった。遣り手とは言い難いが、真面目で堅実、「高貴なるものの義務(ノブリスオブリージュ)」と嘯いて芸術にも理解を示そうとしていた。

例の『青い絵』はその方面で流行だったので、画商の勧めで購入したに過ぎなかった。当初は特に気に入っていた訳ではないが、彼の様子がおかしくなるにつれて絵に執着しだした。

火事の現場

探索者が火事の現場を確認した場合、木造建築が激しく燃えた為に、ほとんどのものが灰燼に帰して

いるが、出火元は主人の部屋、失火であると分かる。

主人の部屋の床面には温井が倒れていたと思しき痕跡がありありと残っている。この人型の焼け残りを見た場合、0/1の正気度を失う。

<目星>か、徹底的な搜索を行った場合、以下のことが分かる。

そこは壁があった場所の前で、壁は半ば崩れているが、何か絵が掛かっていたことも分かる。

主人の部屋も他の場所と同じく一面灰だらけとなっているが、その灰の中に焼けて灰色になったのではなく、色彩を失って灰色になっているものがあることに気が付く。

『枯野』へ行っている場合、そこで見たものと同じような現象がここでも起こったと考えられる。

<芸術(建築に関わるもの)>や、<歴史>などによって、温井邸はいわゆる偽西洋建築で一見西洋風の建築様式に見えるが、実際は日本建築で用いる建材、技法で建てられていたと分かる。

内部も含めて西洋風を徹底していたようで、部屋の構成や配置、家具類も西洋風かあるいは輸入した本物を使用していたようだ。

ここまで激しく燃えた理由は分からないが、建築材が何らかの理由で激しく劣化したのではないかと推測できる。

火事：東京は江戸期に限らず、明治前期などは相変わらず火事が多い土地だった。

都市計画が進むとともに、火事の件数は漸減、1件当たりの火災による類焼も減少したことは確かだが、大正期ではまだまだ古い木造建築や、火災に遭うことを前提とした粗末な木造建築なども多く見られたため、やはり火事は多かった。

7:児嶋鎮邸、光の柱

もう一人の『青い絵の購入者』、児嶋鎮は赤坂区(現在の港区赤坂の辺り)の青山練兵場、赤坂離宮の近くに住んでいる。

探索者が早い段階で児嶋邸に赴いた場合は、約束

が無いことを理由に追い返されるか、約束をしたらすぐには会ってくれないので後回しになるなどして、探索の後半に訪れるように調整すること。

キーパー：

もちろん、早い段階で児嶋邸の探索を行って、「なんだか分からないけれど蕪木が危ない！」と煽る展開もよい。

よいが、探索部分がごっそり切り上げられないように気を付けること。

(『灯火の行く橋』をプレイ済みの場合は、まったくのネタバレになってしまうが)

蕪木のパトロン、児嶋鎮

探索者が児嶋について調べた場合、美術関係、華族、実業家の知り合いなどから以下の情報を得ることが出来る。

児嶋は没落した華族であった一族を自身の商才を持って建て直した傑物である。世間では成金のように言われているが、若いころに美術を志していたこともあり、若い売れない芸術家たちのパトロンとなって様々な援助を行っていた。

客間にあった『青い絵』は蕪木から贈られたものだが、わざわざ画商を介して購入して蕪木に金を渡している。

蕪木がオレンジ色の風景画を描いていた時代から援助しており、オレンジの絵も何枚か所持している。

児嶋邸へ乗り込む

児嶋邸へ探索者が主赴いた時点で、児嶋邸内部には言いようもない不穏な雰囲気漂っていることに気が付く。

児嶋邸に正面から乗り込む場合、身分が華族であるか、<信用>が 50 以上必要だ。使用人を籠絡する等して内部へ入り込む場合、コミュニケーション系の技能を使う。

どちらにせよ、探索者が児嶋邸に乗り込んだ直後、奥の客間から使用人らしき若い女性の悲鳴が響くと共に、淡い青い光が屋敷を満たす。

宙に帰る『青』

探索者が児嶋邸を訪ねるタイミングで、『青い絵』の中の『宇宙からの色』が、宇宙に帰ろうとし始めたのだ。

青い光に満ちた屋敷の中で、使用人たちは驚きのあまり動きが止まっており、探索者達が入り込んできて咎めることも無く、聞かれたことには素直に答える(この状況なので、的外れな質問には答えることは無い)。

光の発生源と思われる奥の客間へ探索者が踏み込むと、そこには蕪木の『青い絵』が飾られており、それが淡く揺らめく青い光を放っており、まるで絵が生き物でもあるかのように蠢いているように見える。

絵の前には児嶋が倒れており、恐怖に引きつった萎びた顔を歪ませて、まだ生きていることが分かる。その顔色は灰色に見えるが、光の加減からか「青く」感じる。この部屋の異様な光景を見た場合、1/1D8 の正気度を失う。

部屋の中に探索者が入った場合、耐久力が 1 点減少し、『青い絵』に向かって生命力が吸い取られていることが分かる。以降、この場に 1 ラウンド留まる毎に +1 点ずつの耐久力が減少する。

絵の前に倒れている児嶋を救出する場合、死体のように全く動かなくなっている巨体を部屋から運び出すには探索者は STR ロールを行う。児嶋の SIZ80 であるため、ハード成功が求められるが、複数人で行うことによって難易度を変更するなどしてもよいだろう。

『青い絵』を攻撃しても、絵の額装には傷をつけることはできるが、青い絵自体は物理的な攻撃の影響を受けない(『宇宙からの色』には物理攻撃は無効なのだ)。

児嶋を運び出すか、3 ラウンドの経過後、絵の放つ青い光はさらに強まり、爆発音のような轟音と共に客間の 2 階部分と天井が吹っ飛び、周囲から生命力を吸い取りながら光の柱となって天に還っていく。

部屋の中に残っている探索者は耐久力が 1D6 点、正気度が 1D6 点減少する(正気ドロールではない)。児嶋を部屋に残していた場合、彼は死亡する。

部屋の外に出ていた場合は、強い光で目がくらむがその他の影響はない。児嶋を連れ出していると、彼は辛うじて生きており、<応急手当>によって容態を安定させることが出来る。

探索者が即座に逃走を選んでいたら、その背後で爆発音に似た大きな音とともに吹き上がる青い光の柱を屋敷の外から目撃することになり、1/1D8の正気度を喪失する。

その後の児嶋邸

児嶋が死んでいる場合、有無を言わず追い出されるか、駆け付けた警察関係者に連れ出されるかする。

児嶋を助けていれば、彼自身はその状態から即座に病院に連れ込まれるが、残った探索者達は屋敷の中を調べて回っても不問に付される(家人に怪しげな連中ではないと保証してもらえる)。

『青い絵』があった客間は、2階部分が完全に吹っ飛んでおり、青空が見えている。

衝撃によって破壊された部屋は全てが灰色になって色彩が奪われている。中に踏み込むと足元の床も脆くなっており、灰が積もっているように思えるが、もとあった絨毯や床が灰のようになって崩れていることが分かる。

部屋の中を調べれば、爆発の中心は『青い絵』であることが分かる。そこから放射状に部屋にあったものの残骸が散らばっているが、奇妙なことに爆発とは別の何かが絵の方へ向かった痕跡が見られる。<目星>などによって、灰の中から元は『青い絵』であったであろう厚めの和紙の断片を見つけることができる。それらは全く色彩が無くなっており完全に灰色になっていることが分かる。

部屋の中には蕪木のオレンジの絵もあり、そちらは爆発によって傷んではいるものの、半ば灰色になっている程度で済んでいる。

児嶋が活着している場合、彼を診察した医者から(<医学>を持つ探索者自身でもよい)、特に身体に異常は認められないにも関わらず、衰弱しきっており、活着しているのが不思議なぐらいだと言われる。

唯一、異常と認められるのは身体の色が不自然な

灰色になっており肌色が失われていることだ(もしも、児嶋の体内に異常が無いかと開腹手術などを試みた場合、その内部にまで灰色が及んでいることが分かり、1/1D4+1の正気度を失う)。

児嶋が死んでいる場合、<医学>、<科学(法医学)>などの検死によって外傷などの直接的な死に至る原因が発見できず、精神的なショックか、理由は分からないが急激な衰弱死、生命力そのものが失われたことが分かる。

8:蕪木の最後の作品

蕪木の部屋に乗り込むには、下宿の大家を説得するか、緊急事態だと無理矢理押し入るのもよい。

蕪木の部屋は6畳で下宿としては広いが雑然としている。しばらく使っていないと思われる汚れた寝具、画材、描きかけのスケッチ等が置かれている。

『青い絵』に使われる青い絵具や、下書き、作りかけの作品なども見当たらない。

部屋は無人だが、<聞き耳>か、しばらく部屋を家探していると天井から何かが蠢ているような気配を感じ、天井から温井や児嶋の屋敷で感じた不穏な雰囲気漂っていることが分かる。

こういった日本家屋は天井裏に上がる為の落とし戸のようなものが天井の隅についていることは分かる。大体が部屋の天井の隅や、押し入れの天井となるが、<目星>か、部屋の天井にはそういった形跡がないことから押し入れだと推理したことにもよいだろう。

押し入れの天井に天井裏への入り口を見つけた探索者は梯子を使うか、DEXロールによって天井裏へ上がることが出来る。

そこは薄い屋根の間からところどころ漏れてくる光によって、天井裏全体に『青い絵』が描きこまれているのが見える。

―――
天井裏の全てが『青』で埋め尽くされていた。

そこはまるで蕪木の『青い絵』の中に入ったようだった。薄い屋根のところどころから洩れる光がまるで青い世界に光る星のようにも思える。

そうだ、これはおそらく宇宙、我々の知らない宇宙の深淵を表しているのだ。

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

探索者は暗闇で輝く『青い絵』が深宇宙を表していることに気が付き、この異様な光景と合わせて0/1D3の正気度を失う。

蕪木はその絵の一部になっているが、見つけるのは特にロールは必要ない。

絵の真中で自身に青い絵具を塗りたくって床に倒れこんでおり、ときおりまだ生きていることを示すように手足がのろのろと動く。

驚く探索者の前で『青い絵』は淡い光を放ち始める。完成した絵が最後に蕪木の生命力を吸いつくして宇宙に還ろうとし始めたのだ。

その場に居る全員は、毎ラウンド耐久力を経過ラウンド+1点失う。

倒れている蕪木を助け出そうとする場合、彼は動かされることに抵抗するため、STR40との対抗判定となる。

3ラウンドが経過するか、蕪木を天井裏から助け出した後、目も眩む青い閃光が発せられるとともに爆発音が響き、天井と天井裏が吹き飛ぶ。

探索者の目の前で天井裏の青い色彩が光の柱となって天に向かって伸び、光と爆風が広がるのとは逆に、周囲から色彩が集まっていくのが見える。吸い取られた色は光の柱の中に消え、周囲は見る間に死んだ灰色へと変わっていく。色彩の移動が終わると同時に光の柱の中のものは宇宙へと還っていく。

天井裏に残っている生き物は、光の柱に生命力を吸収されて耐久力を自動的に6点失う。天井裏から逃れている場合は、3点で済む。

宇宙へ還っていく『宇宙からの色』を目撃した探索者は、正気度を1/1D8点失うが、すでに児嶋邸で光の柱を目撃している場合、その分と合わせて8点までしか減少しない。

光が収まった後、蕪木の下宿の2階部分はきれいさっぱり吹き飛んでおり、辺り一面が灰色の残骸で埋め尽くされている。

蕪木を天井裏から連れ出していなかった場合、それらの残骸に埋もれて灰色になって死んでいる蕪木を発見することになる。

連れ出すのに成功していた場合、彼は児玉同様に非常に衰弱しており、何故生きているのか分からない状態だ。〈応急手当〉によって容態を安定させることがきるが、即座に入院させる必要がある。

9:事件の後

シナリオの結末は探索者の行動によって異なる。

シナリオの経過や探索者の傾向、キーパーの好みなどに合わせて結末を演出しよう。

蕪木の部屋の爆発により、煙草屋は立て直しが必要になり、彼が生きている場合はその部屋を立ち退いて(追い出された訳ではない)、郊外へ引っ越した。

煙草屋の周辺には灰色の残骸が飛び散った以外に、光の柱が見えた後はしばらくの間は疲労感が抜けないことを訴える住民が多かったが、それもしばらくすると健康を取り戻して平常に戻る。

シナリオの結末に関わらず、『青い絵』に使われた絵具は全て失われ、もう描かれることは無い。

探索者達はしばらくの間、残った『青い絵』の始末に奔走するだろう。蕪木が生きていれば、彼自身が手を貸してくれる。

後始末を済ませた後については、探索者自身に語らせよう。

蕪木が生き延びている場合、彼はもう『青い絵』を描くことはできないし、描く気も無い為、またオレンジ色の風景画を描き始めて、そこそこ売れる画家になる(怪想社の頼みで怪奇風の挿絵を描くこともあるが)。

10:正気度の報酬

探索者によって結末は異なるが、この探索を生き延びた探索者は以下の正気度の報酬を得る。

◆ 生き延びている場合、1D6点

- ◆ 蕪木を救出している場合、追加で 1D3 点
- ◆ 児嶋を救出している場合、追加で+1 点
- ◆ 『枯野』で『宇宙からの色』の不完全な雛を葬っている場合、追加で+1 点
- ◆ 事件後に『青い絵』の処分を行った場合、追加で+1 点

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する(敬称等省略)。

- 新訳クトゥルー神話コレクション⑤ 宇宙からの色 星海社
『宇宙からの色』、H・P・ラヴクラフト、森瀬繚訳
- ナイト・フライヤー 新潮文庫
『オレンジは苦悩、ブルーは狂気』、デイヴィッド・マレル、浅倉久志訳
- アメリカ怪談集 河出文庫
『月を描く人』、D・H・ケラー、荒俣宏訳
- カラー・アウト・オブ・スペース―遭遇― リチャード・スントリー監督、ニコラス・ケイジ主演
例の映画です。灰色の場面などの参考に。

- 新クトゥルフ神話 TRPG 株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG クトゥルフと帝国 株式会社 KADOKAWA
- 暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー 新紀元社
- 暗黒神話 TRPG トレイル・オブ・クトゥルー・ジャパン 新紀元社

- 『大正略字』フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104> ※フリーなのでぜひ、ご活用を！

- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

『トレイル・オブ・クトゥルー』向けに作成した『灯火の行く橋』のゆるい続編『青は狂気を描く』を、『新クトゥルフ神話 TRPG』向けにコンバートした版になります。

シナリオの内容自体にはまったく変更ありませんが、新 CoC 向けに変更を施したり、一部捕捉を追記したりしています。

再度になりますが、元ネタのデイヴィッド・マレル『オレンジは苦悩、ブルーは狂気』は名作です。是非とも、読むことをお勧めします。

奥付

発行日：初版 令和 5 年 10 月 4 日

発行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(Twitter:@EDO_RAMv200)